

特集にあたって

福 家 崇 洋*

上 田 学**

京都大学人文科学研究所（人文研）は、2015年度より近代日本の学知を支えてきた学術資源の調査・整理・研究を目的とした「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」を進めてきた。現在、同プロジェクトは9つのサブ・プロジェクトから構成されている。その1つ「山本明氏・都村健氏旧蔵映画・演劇資料の整理・公開プロジェクト」では、社会藝能文庫の山本明氏、マキノ映画の宣伝部長を務めた都村健氏が所蔵していた2万点を越える一次資料の整理・研究・公開に取り組んでいる。

本特集は、山本明氏が所蔵されていた日本映画史の一大資料群（「山本明氏旧蔵コレクション」、本特集の各論文では便宜上「山本明コレクション」に表記を統一）を活用して、映画学、映画史、文化運動史、日本近現代史にわたる隣接分野の研究者が各自の研究上の課題にひきつけて執筆した論文から成る。

同資料の受け入れの経緯は、本号収録の高木博志「「山本明氏旧蔵コレクション（山本明社会藝能文庫）」について」に譲るが、2015年度に人文研への寄贈を快諾してくださった山本明氏ご長男の愼一氏、また寄贈にあたり御尽力いただいた富田美香、紙屋牧子、鷺谷花の各氏にまずは御礼を申し上げたい。

山本明コレクションは、貴重な映画ポスター、プレスシート、ビラ、スチル写真、また映画関連団体の運営資料、機関紙誌、図書などからなり、控えめにいっても、日本で有数の映画史のコレクションである。この膨大なコレクションの整理作業に際して、寄贈前に山本愼一氏自ら作成してくださった目録が大いに役立った。このコレクションが整理・公開されていくことで、今後、人文研が映画および文化運動の共同研究拠点となっていくことが期待される。

山本明コレクションの公開は、日本映画史の研究に大きく寄与するものである。山本明コレクションを構成しているノンフィルム（非映像）資料は、映画史において近年注目を集めてい

*ふけ たかひろ 京都大学人文科学研究所

**うえだ まなぶ 神戸学院大学人文学部

るが、とりわけ現存しにくい、観客自身が発行したピラ、機関紙誌等の資料が、コレクションの大きな部分を占めていることが、その重要性を増している。映画史は、作品を生成する製作側のみならず、それを受容する観客側との相互的な関係のなかで生み出され現在に至るが、観客側の資料は残りにくく、製作側の資料にもとづく一面的な歴史叙述となりがちである。山本明コレクションは、そうした日本映画史の欠落を補完しうる可能性に満ちた資料群であるといえるだろう。

この資料群を前に、2015年度から昨年度まで全国から映画学、映画史、文化運動史、日本近現代史の研究者が人文研に年数回集まり、お互いの専門分野にもとづいた意見を交換しながら資料整理を行った。参加者は今井瞳良、上田学、小川佐和子、紙屋牧子、木下千花、高木博志、立本紘之、鄭琮樺、中村唯史、福家崇洋、花田史彦、フィオードロワ・アナスタシア、水野直樹、森岡洋史、安裕太郎、鷺谷花の各氏である。また、これまでの共同研究作業一覧については稿末の「2016～20年度 山本明コレクション整理の歩み」を参照されたい。

いまでも印象的なのは、普段は黙々と作業する研究者の面々が、面白い資料が発見された途端、そこに集まり、和気藹々とした雰囲気の中で、その資料について活発な議論や雑談が行われたことである。コロナ禍の現在、こうした共同作業でこそ味わえる醍醐味は得がたいものになってしまった。濃密かつ中長期的な共同研究を大事にしてきた人文研にとっても、その意義を改めて見つめ直す必要があるだろう。

こうした整理作業と同時並行で、私たちは非公式の共同研究も重ねていった。本特集はこのときの研究発表が基礎となっている。学際的ゆえに、お互いの方法論や知識を交換できたことは有意義であったし、相互の専門分野についてより理解を深めることができた。共同の資料整理作業に費やした濃密な時間こそがその土台にあることはいまでもない。その意味で、本特集に収録した論文は、それぞれ個別に発表されるのではなく、共同作業・共同研究の成果として特集号上で公開されることがふさわしい。

本特集の説明に移る。まず山本明コレクションとは何かを理解するうえで重要なものが、高木博志「山本明氏旧蔵コレクション（山本明社会藝能文庫）」について」と森岡洋史「山本明コレクションの映画資料概要と整理方針」である。

高木氏の紹介文には山本明コレクション受け入れの経緯が記されている。とくに、このコレクションが山本明氏の長年にわたる収集の成果であるとともに、山本家の日常とともにあったということが重要だろう。歴史研究者はつい利用だけを重視する傾向にあるが、資料は収集とその保存維持に膨大な手間暇や資金が必要である。利用に際してその作業を担ってこられた方への敬意と感謝を忘れてはならないことを、本稿は思い出させてくれる。

その資料群の全体像を知るうえで有益なのが、資料整理を中心となって担ってくれた森岡氏の論文である。資料は一点だけを取りだしてもその内容を理解することはできない。背景とな

るコレクション全体に対する理解が欠かせない。森岡氏の論文はその最良の導き手である。

また山本愼一氏作成の目録をもとに、森岡氏、今井瞳良氏らが数年にわたって毎週整備・作成してくれた巻末の目録を見ることで、本コレクションの概要がさらに理解できる。紙幅の都合もあり、目録の一部のみの収録となったが、今後、目録も含む資料公開については、公開方法など協議・検討のうえで、人文研のホームページでお知らせしたい。

次に、各収録論文の紹介に入る。論文は分析対象とした年代順に並べた。いずれの論文もその分析に山本明コレクションが有効に活用されており、1940年代末から1960年代後半までの映画および文化運動が取り上げられている。

立本紘之氏の「戦後初期地方文化運動と政治組織 ——「全大阪映画サークル協議会」の事例から ——」は、1949年設立の全大阪映画サークル協議会など戦後初期の地方文化運動組織と同組織に影響を及ぼし得た政治組織(日本共産党)の関係・距離について考察したものである。文化運動組織と党との、指導と自律性をめぐる複雑な関係がクリアに整理され、映画を含む戦後日本文化運動史研究に大きくかつ深い一石を投じている。

鷺谷花氏の「山本明コレクション資料にみる『どっこい生きてる』(1951)上映促進運動の実態」は、独立プロダクション映画運動に大きな影響を及ぼした今井正監督の映画『どっこい生きてる』を取り上げ、同映画の上映促進運動が戦後映画史に果たした役割を明らかにしたものである。とくに、この宣伝活動のなかで、幻灯上映が担った重要な意義が鷺谷論文で発見されたことは特筆に値しよう。

フィオードロワ・アナスタシア氏の「岸旗江という女優 —— その売り出し方にみる1950年代「独立プロ映画」のイメージ戦略」は、独立プロを「独立」的に論じてしまう既存の研究を念頭において、自主映画の看板女優として活躍してきた岸旗江のメディア・イメージを分析したものである。そこで指摘されるのは、商業的メインストリームとの連続性であり、独立プロ映画の芸術的特徴や、その歴史的な存在意義、戦後の日本におけるジャンル映画の系譜を考え直すうえで重要な手掛かりを与えてくれる。

今井瞳良氏の「映画興行と映倫改組 —— 太陽族映画問題をめぐって ——」では、1956年に立て続けに公開された「太陽族映画」に対する映画規制の動きが、映倫改組をめぐる興行界の動きを中心として分析される。興行界で自主規制の意識が高まることによって新映倫の存在意義が浸透していったことが指摘されており、興味深い。映画の製作と興業を戦後社会における規制する側との関係から見つめ直す意義深い取り組みである。

小川佐和子氏の「二重の神話化：日本における『戦艦ポチョムキン』上映史」は、ソ連映画史に名だたる『戦艦ポチョムキン』を対象に、作品より理論が先行して受容された戦前期日本の状況を背景として、モンタージュ理論の受容とともに形づけられた「幻の映画＝ポチョムキン」神話と、1960年代の自主上映活動の過程を通した「世紀の名作＝ポチョムキン」神話を

論じている。日本とソ連、1920、30年代と60年代の関係が相互に編まれるなかで、上映活動にカノン化された評価やソビエト文化のコードがあることが明らかにされていく。

上田学の「山本明コレクションにみる全神戸映画サークル協議会の地域性」は、1950年に発足した全神戸映画サークル協議会が、映画館の地域性とどのように結びついていたのかを描いたものである。協議会における自主上映運動という本流とは異なる映画批評の革新を求める独自の動き、協議会を支えた神戸の映画館の存在、入場割引停止をめぐる映画サークル協議会と興行協会の対立が神戸の都市構造の変化と結びついていたことなど、地域性を踏まえた分析ゆえに浮かび上がる映画運動組織と社会の関係が示されている。

福家崇洋の「映画『武器なき斗い』と戦後自主製作・上映運動」は、戦前の無産政党政治家・山本宣治を描いた、山本薩夫監督の映画『武器なき斗い』（1961年公開）の製作・公開過程を実証的に検討したものである。同論文では、60年安保闘争で日本社会が盛り上がるなか、京都・大阪という地域における独立プロ、映画サークル、労働組合の各組織が戦後の自主製作・上映運動において果たした役割が跡づけられている。

花田史彦氏の「青年の理想主義について——映画『若者たち』とポスト高度成長期のサークル文化運動」は、映画『若者たち』（1968年公開）の流通と受容との過程を跡づけたものである。本論文では、同作が日本共産党系のサークル運動によって公開され、人気を博していった様子を具体的に再構成している。そのうえで人気の背景として、党派性のみならず、当時の人々のあいだで広く共有されていた「まじめ」な心性の存在を明らかにした。1950年代のサークル運動からの連続と変化を考えるうえで重要な指摘である。

紙屋牧子氏の「映画『祇園祭』を伊藤大輔の作家性から再考する——「傾向映画」との接続と非接続」は、近年研究が進む映画『祇園祭』（1968年公開）を、製作に関わりながら途中降板した伊藤大輔監督の作家性という視点から読み解いている。その際、重要なのが「傾向映画」との接続・非接続である。伊藤のセルフメイク作品『下郎の首』（1955年）との関連を指摘しつつ、主人公の理不尽な死を現代に重ねる演出プランには、民主主義の勝利の象徴としての主人公のアクチュアリティの視覚的な表現に加えて、伊藤の作家としての抵抗をも重ね合わせられるとの指摘は、私たちを新たな『祇園祭』像へといざなってくれる。

本特集の最後を飾るのが京楽真帆子氏の「資料紹介「伊藤大輔『映画「祇園祭」——物語の輪郭——』」である。幻に終わった伊藤大輔監督の『祇園祭』を記録する唯一の資料である「赤本」（京都府立京都学・歴史館および京都文化博物館内伊藤大輔文庫所蔵）を、伊藤文庫所収の自筆草稿、自筆メモなどの情報を注記しながら翻刻・紹介したものである。京楽氏の論は、資料紹介にとどまらず、同氏が現在進めている「映画史料論」の実践である。歴史学的手法にもとづいて、映画作品の製作過程を歴史段階として把握、その各段階のデータを歴史資料と扱い分析する手法である。本特集のような学際的な共同作業・研究を通じて、新たな学問領域が今後

育っていく展望を感じさせる。

以上で本特集に収録した論文の紹介を終わる。これらの論文に見られる戦後の独立プロやそれを支えた映画サークル運動の分析によって、映画と社会の関係がこれまでより明らかになったことは間違いない。それを可能にしたのが、山本明コレクションである。この特集および収録論文によって山本明コレクションが世に知られ、今後も末永く研究に貢献していくことになれば、この資料を生涯にわたって集めてこられた山本明氏にも喜んでいただけるのではないかと考えている。

○2016～20年度 山本明コレクション整理の歩み

2016年

5月10日 山本明コレクション整理の方針の打ち合わせ

8月8～9日 第1回の山本明コレクションの整理——図書・雑誌の抜き出し作業

9月21日 映画史・東山花街巡見

11月4日 山本明コレクションの整理——図書・雑誌を対象

12月26～27日 山本明コレクションの整理——図書と雑誌以外の一紙もの、事務書類、パンフレットなどの整理開始

2017年

2月14～15日 山本明コレクションの整理

8月2～3日 山本明コレクションの整理

12月27日 山本明コレクションの整理, 28日 映画史・高原巡見

2018年

3月26～27日 山本明コレクションの整理, 26日夜に祇園文人バー「藤」の店主らと「ちひろ」にて研修

8月6～7日 山本明コレクションの整理

研究報告：鷺谷花『『太陽の王子 ホルスの大冒険』にみる左翼文化運動の資源——労働組合・人形劇・サークル——』

12月26～27日 山本明コレクションの整理

研究報告：小川佐和子「二重の神話化：日本における『戦艦ポチョムキン』」

立本紘之「山本明資料と大原社研所蔵資料の比較・検討」

2019年

3月25～26日 山本明コレクションの整理

研究報告：森岡洋史「山本明資料 細目録作成作業状況の報告」

紙屋牧子「国立映画アーカイブ所蔵ノンフィルム資料の保存・公開事業」

7月20～21日 山本明コレクションの整理

研究報告：木下千花「胎児が密猟するまで——原水爆禁止運動と「胎児」の誕生——」

今井瞳良「恵楓園と全患協と映画サークル——『あつい壁』の上映をめぐる」

12月27日 山本明コレクションの整理

研究報告：高木博志「近現代史のなかの映画『祇園祭』—— もう一つの明治 100 年」、
上田学「神戸映画サークル協議会について」

2020 年

5 月下旬に研究会開催を予定していたがコロナ禍で延期（以後開催できず）



島原巡見の一コマ（2017 年 12 月）